



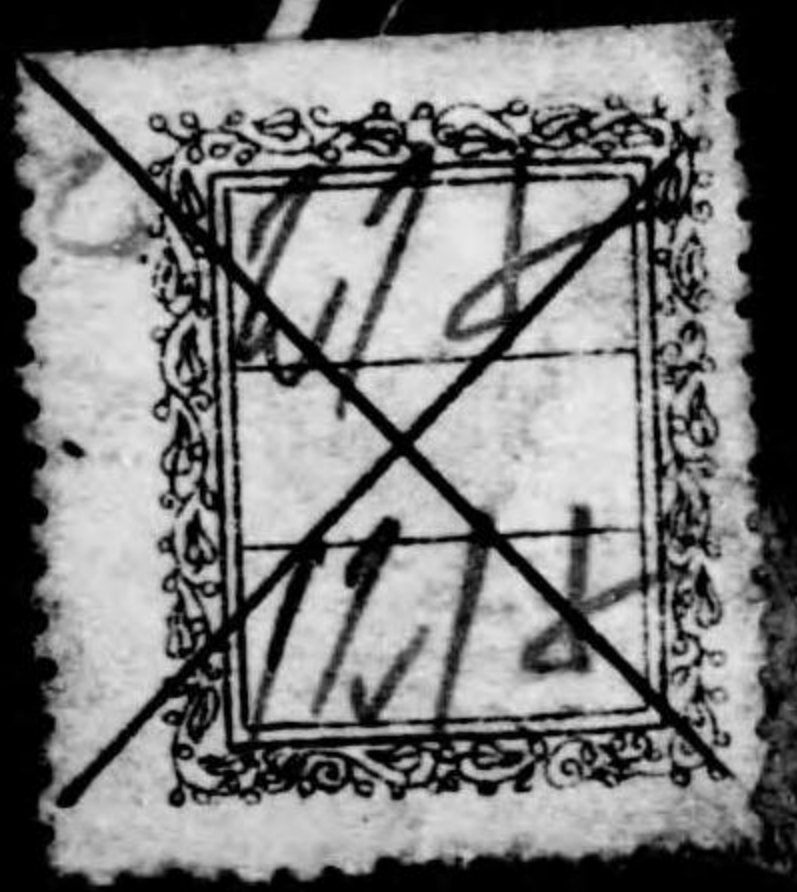
特100

791

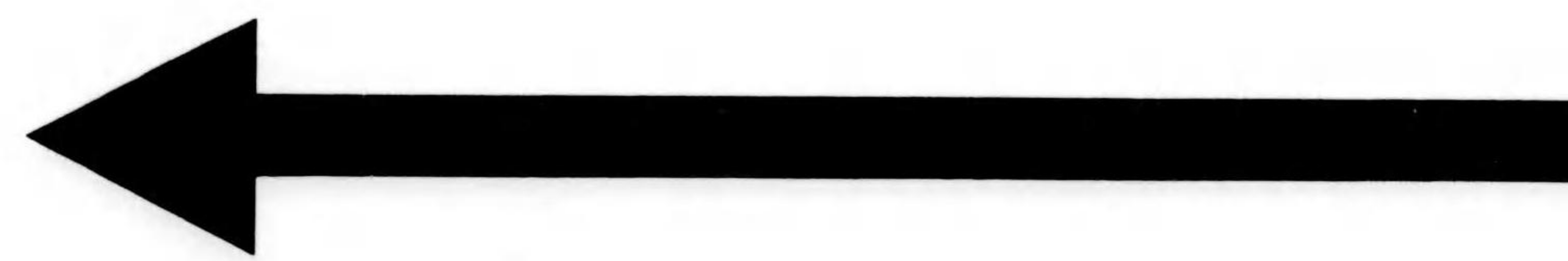
軍港実話

あらの坂北怪劇

東子



始



特10
791



軍港
あらし
の夜の惨劇

東
天
紅
著

大正
6. 12. 3
内交



實業
軍器

あゝのあゝのあゝ

東 天 孫 著



自序

二人の啞者が共謀して 前後二回に巨り殺人及び強盜殺人を行つたといふ稀有の事實は、今尙耳新らしく、獨り其の土地のみの印象でなく、全國に響いてゐる。之を小説に脚色して出版したのは、一面關係警察署の功勞を誦ふと共に、所謂勳善懲惡を基として、浮世の因果關係を物語るの目的に過ぎない。篇中一人の啞者は、殊更觀多の如く變じて、其の殘忍な性格を言葉に現はすこととし、其の他各人物の氏名、境遇等



も適宜變更したのは、事件が未だ豫審中なるが故である。讀者之を諒せられよ。

大正六年の秋十一月

吳公論社編輯局にて

東 天 紅 誌す

白刃一閃

あはや

咽喉に!!



目次

(1)

一	裂帛の叶び聲……………物凄い暴風雨の夜……………	一
二	富島中尉夫人……………惨たる二個の死體……………	七
三	羅沙の切れ端……………犯人が持つてゐた……………	三
四	機密室の會議……………海軍刑事は單獨で……………	九
五	侮蔑と嘲笑と……………僕には自信がある……………	二六
六	有力な手係り……………血潮の付いた番傘……………	二四
七	尾行する刑事……………裾の千切れた外套……………	三九
八	あゝ苦心惨膽……………署長と警部の會談……………	四四
九	昔の夢物語り……………花吹雪新婚の二人……………	五〇
一〇	奴ッ兇漢め！……………不思議な夢の暗示……………	五九

(2)

一 色の青白い男……………番傘と外套に目星……………五
 二 星月夜の人影……………艦純屋は其實刑事……………七一
 三 一人は聾啞者……………竹梅樓へ二人の客……………六六
 四 御用だ待てッ……………此所ては辻占賣り……………六四
 五 愈々五里霧中……………九連警察署の暗雲……………九一
 六 二度目の慘劇……………出刃庖丁をプスリ……………九六
 七 あゝ血潮の海……………由々しき強盜殺人……………一〇六
 八 一縷の光明？……………彼は何を考へたか……………一二三
 九 兇漢遂に就縛……………最う覺悟は定めた……………一二〇
 一〇 再び平和の春……………我國警察界の威信……………一三四

軍港 實話
 あらしの夜の慘劇

東 天 紅 著

一 裂帛の叫び聲

物凄い暴風雨の夜

(1)
 昨日の夕、犀ヶ峯の空から黒い千切れ雲が一つ、西に向つて怪しく飛ぶと見る間に、それが恐ろしい嵐になつて、沛然と降り出す雨を横なぐりに樹や家へ叩き付け、宛然野獸の吼わることが如く、物凄い音立て、鞆と襲ひ來るのであつた。

(2)

頃しも十月半ば、明け方に近い空は、暗澹と雲に掩はれ墨を流した如く、黑白も判ぬ鳥羽玉の、人ツ子一人通らぬ此處九連市横山町の兎ある路次に、忽ち闇を破る裂帛の叫び聲が聞けた。

『人殺し……い、助けて……。』

と其の聲は若い女が、今にも斷末魔の苦しみから、絞り出すやうな聲であるが、此處を先途と狂ひ荒ぶ雨と風、鞞鞞の聲、澎湃の音天も地も只一揉みに、揉み潰さん勢であるから、到底此の物凄しい悲鳴が、近所の家にも聞えよう筈もない、横山町と云へば、只さへ淋しい屋敷町で、此の邊りに棲む人は、海軍將校か、工廠の技師か、職工か、何れは宵の内から固く門戸を閉して、日が暮れると、女子

(3)

供の通るさへ稀な程である、其の横山町に突然降つて湧いた女の悲鳴、而も暴風雨の真夜中何物か一大事の突發したことは、最早疑ふべくもない。

二分、三分、時は次第に過ぎて、聽て怪しい悲鳴もバツタリ止んだ、遂に女は殺されて了つたのであらうか？ 或は悲鳴に驚いて狼籍を中止したのであらうか？ 暫らくは風雨の音に紛れて、何物も聞けなかつたが、聽てものゝ十分も経つた頃、今度は火の付くやうな赤兒の泣き聲が聞え出した、そして何時まで経つても泣き止めない、宛然腸を絞るやうな聲で、益々泣き叫ぶのである。

此の時雨は稍小降りになつて、風も大分落ちた様子、氣魂しい泣

(4)

き聲を、先づ第一に聞きつけたのは、隣りの家の兵曹の妻君であつた、最初は左程氣にも止めなかつたが、却々泣き止めないので、漸く不審の首を寢床から擡げて、

「貴男、お隣りの子供が、大變泣いてるやうですよ」

兵曹も不審に思つてゐた矢先だから、

「仕うしたのだらう、今迄彼處に泣くのを聞いたことが無いが、何か變つたことでも起つたのぢやないか知ら。」

「眞當に風は此處に吹いてるし、火でも出されたら大變ですわね。」

「まあ兎も角、行つて見るが好からう。」

恚う言つて夫婦は起き上つた、兎もすれば風に吹き消されようど

する提灯の灯を、傘で避けて裏の塀傳ひ、隣り屋敷の裏手へ廻るも兵曹は大聲を上げて

「富島さん……富島さん……。」

と叫んだ。併し内からは何の返事も聞かない。只相變らず、赤鬼は火の付くやうに泣き叫んでゐる。

「仕うしたのでせう、返事が無いやうですね。」

妻君は最うブル／＼顫れてゐる。

「慥かに何事が起つたに違ひない、おや、裏の木戸が明いてるやうだ、奥さんが今時分出て行く筈はないがね。」

(5)
「妾、何だか怖くなりましたわ、近所の人を起しませう、そして」

(6)

緒に入つて貰ひませうよ。』

兵曹は薄笑ひして

『待て、俺が入つて見よう、若し變つたことなら近所に知らせなければ……。』

憊う言つて、兵曹は明いてゐる裏木戸から入つて行つた。すると勝手場の入口の戸が矢張り明いてゐる。愈々怪しいと思ひながら、尙も聲を激まして、

『富島さん……。』

と呼んだが返事がない。そして不思議にも電燈が消れてゐる。薄暗い提灯の光を頼りに、座敷へ上つて、赤兒の寢間へ近付かうとす

(7)

る途端、ベツタリ足の裏に附いたものがある。ハツと思つて、提灯に照して見れば這は抑も如何に、生々しい血汐が、畳一面に、海の如く擴がつてゐた、更に驚くべきは寢室の入口に、髪振乱した女が、朱に染つて倒れてゐた。

『大變々々、富島の奥さんが殺されてゐる!。』
兵曹は大聲で叫び立てた。

二 富島中尉夫人

惨たる二個の死骸

聲に驚いて、程なく近所の人々が馳せ集まつた。變事はまたく

(8) そればかりではない。殺された女の傍には、四ツばかりの女の兒が、之も咽喉を刃物で抉られて、虚空を掴んで絶命してゐた。あゝ何といふ悲惨の有様であらう。馳せ集つた近所の人々の中には、餘りの惨めな光景を、見るに堪へずして顔を反ける者もあつた。併し大膽にも肌障つて見て、

「まだ温まりがあるやうだ」

と呟やく者もあつた。聽て此の事は逸早く近くの交番所へ注進されたので、二人の巡査がサーベルを鳴らしながら遣つて來た。

「あゝ非道い暴風雨だ、今夜のやうな晩に好く事件があるものさ。」「憚う言つて外套の儘で、ツカ／＼と座敷へ上つたが、血に染む二

人の死骸を見るより有繫に愕として、

「さては母娘を殺したのだな、實に残酷な事をする奴もあるものだ、何しろ早く犯人の手當が行届けば好いが……。」

と巡査の一人は四五人の人々を省みて

「一番先に發見したのは誰です。」

と尋ねた。兵曹は前に進み出て

「自分です、餘り赤兒の泣き聲が激しいものですから家内と一緒に起きて來たのですが、初め見た時は全く驚きましたよ。」

(9) 巡査は兵曹の名前や、裏木戸の開いてゐたこと、其の他周圍の事情など詳細に聞き訊して、

(10)

「主人は海軍中尉で富島茂と言ひましたね、艦は何です、今何處にゐるのでせう。」

「軍艦秋葉です、目下は遠洋航海中です」

「成程、して見ると家内は、妻君と子供が二人とだけなのですか？」

兵曹は鳥渡考へて、

「下女が一人居ましたが、多分二三日前から實家の方へ歸つてゐる筈です。」

「殺された女は妻君の春枝に、長女の花子ですね、そして泣いてゐた乳呑兒は？」

「光子さんとか言ひました、年は二歳位でせう。」

「乳呑兒の泣き聲が、最初聞けたのは何時頃でした？」

「好くは覺えませんが、此家へ来る十分許り前、多分三時二十分頃だつたと思ひます、」

「巡查と兵曹とが、此處問答をしてゐる時誰か氣魂ましいい聲を上げて、」

「警官、此處に出刃庖丁が落ちて居ます。」

と叫んだ。すると今一人の巡查が透さず、

(14) 「では障らないで、其の儘にして置いて下さい、兎に角死骸の傍に寄つては不可ん、まだ一應検査官が見知るまでは、誰も此の室にゐる品物に障つては、不可ません。」

と嚴かに言ひ渡した。

急報は早くも、九連警察署に達してゐたので、夜間ながら非常召集は行はれ、市中は秘密の内に物々しく殺氣立つたのであるが、繼つて、小野署長は自ら司法主任の田邊警部始め、敏腕な刑事の面々を率いて、此の慘劇の現場に馳せ付けたのである。

一行が乗込むと共に、室の中の人々は皆外へ出された、そして靜蕭に取調は開始された。

嵐はまだ上まない。横なぐりの雨はサツと雨戸を打ち、木の枝はヒユウと凄じい音を立て、室内の慘たる光景と相對すれば、その肌粟を生せしめるのであつた。

三 羅紗の切れ端

犯人が持つてゐた

世にも恐ろしい大惨害の憂き目に遭つた富島家は、抑も宿世如何なる因縁が結ばれてゐたのであらうか、老少不定は世の常とは言ひながら、之は又餘りの慘事である、主人の富島中尉は廣島縣下のさる片田舎に生れ、家は豪農として門閥家として附近に並ぶ者もなく、中尉の實兄は現に代議士として、言論界に鋒々の名を擧げてゐるのであるが、中尉は次男のことではあり、夙に海軍々人を志し、郷里の中學校を卒業後、兵學校に學び、應て九連鎮守府麾下の一將校

として、才學兼備の譽れ高く、専ら同僚の模範と仰がれてゐる、そして中尉は四年前の春、月下氷人の媒介で、隣村の豪農の娘と、目出度く華燭の典を挙げた、それが實に今回、何者かの爲に慘殺された春枝夫人だつたのである。

夫人は鄙には稀な美人であつた。一方眉目清秀の富島中尉と、夫婦新婚の當時、並んで撮つた寫眞は、見る物の羨望の的となつてゐた、淡白な中尉と温順貞淑な妻と、睦まじい新婚の一年は、恰かも爛漫たる櫻の園に、棚曳く春霞の中を逍遙する如き心地の内に過ぎて、夫婦の仲には可愛い情の胤を生み落した。それが昨夜、春枝夫人と共に殺害された愛嬢花子であつた。

夫婦の仲には更に去年の秋生れた光子嬢があつた、憊うして洋々春の如き家庭に、夫婦親子四人が楽しい月日を送つてゐた、素より財政上に少しの不自由があるでなく、家内に些かの揉め事があるでなく、眞に幸福な人達だと、中尉の同僚も羨まぬ者はない位、されば春枝夫人が、人から恨みを受けるなどは無論のこと此の度のやうな恐ろしい出来事に出會さうなごとは、到底圖り知られぬ所である。此の夏から夫の中尉は軍艦秋葉に乗つて、遠い南洋の空に旅立ち、留守は春枝夫人が、二人の令嬢大事と育てゝゐた。

あゝ降つて湧いた椿事とは此の事であらう。憊る美しい幸福の一家の事情を聞く者は、誰として運命の餘りの數奇にして、殘酷なる

を驚かぬ者はあるまい。

検察官たる署長や警部、刑事の面々など、人事とは言へそぞろに同情の涙を禁ずることは出来なかつた。

「犯人は何者とも判らん、先づ第一に逃走の経路を知るの必要があるが、それも此の暴風雨では捜査の困難は一通りであるまい。」

小野署長は思はず深い溜息を漏しながら言つた。今迄刑事を指揮しながら。屋内を隈なく調べてゐた田邊警部は、此の時前に進み出て、

「什うも金を取つて逃げた形跡は見當らないやうです。金庫にも筆筒にも、嚴重な鍵の懸つた儘ですし、それに小出しの金も戸棚の中

にチャンを置いてある所を見ると、金も品物も持逃げたものでは無からうかと思ひます。そして犯人は、最初裏口から入つて、先づ勝手場の方へ行つて、其處から此の出刃庖丁を取出したやうです。」

と敏速にも経路を濃々と調べて物語つた。署長は一々無言の儘で頷首いてゐたが、一方最前から餘念なく、屍体を調べてゐた警察醫は此の時顔を上げて、

「夫人の方は致命傷が頸部にあります、尤も二度ばかり鋭利な刃物で突いてゐますが、最初の一撃が動脈を切断してゐて、後のは只留めを刺した丈らしい。」

と今度は子供の屍骸に障つて見て、

(18)

「之も致命傷は咽喉部にあります、他には何等擦過傷もありません。儘かに此の出刃庖丁で行つたものに違ひないやうです。」

領首いてゐた署長は、ふと何物かを発見したやうにツカ／＼進み寄つて、

「其の夫人の右の手に、何か握つてるやうぢやないか、何ですそれは……。」

と指さした、刑事の一人が早速行つて、右の手を開かうとしたが固く握り占めてゐるので容易に明かない。漸く指を一本々々放して見て、

「おや、此麼ものを握つてゐます、羅紗です、羅紗の切れ端です。」

「何、羅紗の切れ端？」

何事にも敏活な頭腦を持つた田邊警部は直ぐと領首いて、

「うむ、儘かに犯人の身に纏つてゐたものに相違ない。」
と呟やいた。

四 機密室の會議

海野刑事は單獨で

(19)

其の夜の富島邸の慘劇は、早速翌日の新聞紙に長々と書き立てられた、土地の新聞紙は言ふまでもないが、舞臺が軍港地であるのと、それに被害者が海軍將校である爲に、東京、大阪の新聞に至るまで、

大きな活字で載せられた。而も犯人はありふれた強盗の仕業でないといふので、或は姦淫の目的であらうとか、又は中尉に恨みを抱く者の仕業に違いないとか、或は春枝夫人に對する戀の意趣晴しであらうなどと、勝手な臆説を附け足してゐるのもあつた。又一方犯人檢舉の鋒先は九連警察署に集まつて、鞭撻的に或は攻撃的に鋭い筆鋒を向けてゐた。

慘劇の夜から昨夜へかけて降り続け、吹き續けた暴風雨も、今朝は忘れたやうに、カラリと晴れ上つて、麗かな小春の陽は、窓のカーテンを徹して室の一隅を照してゐる。今しも九連警察署の署長室に、獨り安樂椅子に凭れながら、今朝の新聞紙に一々眼を通してゐる。

た小野署長は、聽て新聞紙を卓子の隅に寄せて、凝乎と眼を閉て、何事が深い黙想に耽るのであつた。

署内は前夜俄かの非常召集に驚いて、一日一夜を眠らずに活動を續けた大勢の署員が、各自睡眠不足の顔付で、右往左往に立延つてゐた。何となく周囲の空氣が緊張してゐて、餘り巫談口を叩く者もない。

「署長殿……。」

と低く力のある聲が突然聞けた。小野署長はハツとして、閉ぢた眼を開くと、其處には色の淺黒い、何方かと言へば小柄な、司法主任の田邊警部の姿が立つてゐた。

「田邊君、手係りが少しはあつたのか。」
と署長は濃い髭を撫でながら言ふ。

「實はその事で、昨夜徹宵各方面の捜査に従事してゐた刑事が二三人歸つて來ましたので、其の報告なり意見なりを、之から聞かうと思つてゐる所なのです。」

警部は威儀を正して報告した。

「そうか、俺も聞かう、直ぐに機密室の方に一同を集め給へ。」

「承知致しました。」

警部は直ぐに去つた。署長は靜かに椅子を離れて、署内をコツコツと歩きながらも、署員の事務振りに視線を配つて、懸て樓上の機

密室の方に歩を運んだ。

室内には豫て田邊警部を始め、吉川警部補、松江部長などの司法
部員に、松山、新川、阪本、末森、赤石など何れも一騎當千の敏腕
な刑事連、有繁に關西第一と呼ばるゝ大警察署だけに、居並ぶ連中
も顔も多い、専ら刑事事務の主腦を掌る桂木刑事部長は、一昨夜
來の刑事の活動振りに關する報告を纏めて、一應田邊警部の許に差
出した。警部はそれを受取つて更に署長に報告する。

それ等の報告は千差萬別、兇行の嫌疑者として引捉ねた者も二三
人あつたが、報告の中に比較的耳を傾けるに價するものとしては、
兇行の夜が明けてから、横山町と餘り遠くない、濱西町の溝端に、

血潮に染んだ帯の捨て、あつたこと、及び春枝夫人に横懸慕した兵曹があつて、五六は前夫人を口説いた事實を聞いたこと、の二つであつた。署長は首を捻つて、

「何れも注意すべき説である、或は其の血の附いた帯といふのが、犯人の捨てたものかも知れない、又口説いた兵曹が痴情の結果兇行を演じたものかも知れないが、茲に注意すべきは屍體の手に固く握つてゐた羅紗の切れ端だ、之は素人眼に見ても兵曹の服の羅紗とは全然質が違ふ、俺は或は將校マントの羅紗ではあるまいかと思ふ。兎も角各方面に於ける捜査を秩序的に、部署を定めて充分に行つて貰ひたい。」

と署長は咳一咳して、徐ろに一座を見渡しながら、

「要するに本事件は世にも殘虐を極めた殺人事件である、云ふまでもなく我署の管内に、斯る戦慄すべき事件の發生を見たことは、畢竟當署の取締任務が不行届であつたと見ねばならぬ。随つて其の責は不省署長にあるのだから、此の際何處までも粉骨碎身して、以て此の耻辱を雪ぐのは、不省署長の義務と心得る、無論署内に勤めて下さる諸君も、社會の爲め、充分に署長を助けて、此の任務を勵行して下さること、信じてゐる。殊に事件の内容が單なる強盜殺人でない以上、其の内容は可なり複雑なものを見ねばならぬ、或は情的關係に、或は財的關係に、諸方面を取調ぶる毎に、今後捜査は愈々

困難に陥り、乱麻の中を彷徨する如き状態に陥らぬとも限らない。而も責任は署長にありながら、之等の乱麻に快刀を揮ふのは、一に敏腕なる諸君の腕に俟たなければならぬ次第であるから、仕うか念頭を國家に置いて、献身的なる努力を捧げて戴きたい。』

滔々と述べた所に依つて、居並ぶ面々は只管に同感の辭を漏すのであつた。

田邊警部は聽て一同を見廻しあがら、

『本事件の捜査に關して諸君の御意見もあらうと思ふ、仕うか遠慮なく此の場で述べて貰ひたい、一同の参考になるだらうと思ふから』と言つた。此の言葉に従つて、先づ田邊警部から、順次に意見を

吐くことになつた。そして一同は悉く、其の意志の命する所に依つて、各部署の捜査に着手することゝなつた。併し最前から、室の片隅にありながら、黙然と腕を拱いて、一同の説を聞いてゐた一人の新參の刑事があつた。桂木部長はそれを眺めて、

『おい海野君、君は先刻から大變沈み込んでる様子だが、何か考へることがあるのかね。事件に關しての意見があるならば、此處で言つて見たら仕うだね。』

と問はれて海野刑事は、靜に顔を上げた。

『いや、別に意見と言つてはありませぬ。』

『それでは松山刑事と共に、兵曹の方の捜査に活動して呉れ給へ。』

と田邊警部の命令、海野刑事は恐る／＼進み出て、

「お言葉に反くやうで恐れ入りますが、私は本事件に關して、直覺的に或る暗示を與へられたやうな氣がするのです。勿論理窟で言へば馬鹿々々しいから控わてゐたのですが、署長閣下に頼み致します、仕うか私だけには、特別を以て單獨の行動を取らして戴きたいのです。」

と臆する色なく、決然と言ひ放つた。」

五 侮蔑と嘲笑と

僕には自信がある

街頭の柳は半ば黄ばむで麗らかな、小春の日が、路上に黒い影を描いてゐる、今しも警察署前の電車線路に添うて、那賀町の方へブラ／＼と歩いて行くのは彼の海野刑事であつた。彼は何物かを思ひ耽るが如く、腕を組み、頭を垂れて、トボ／＼と歩いてゐるので、兎もすれば、傍らの線路を、電車がゴーツと烈しい音を立て、行き過ぎるのに、吃驚して振向くのであるが、又直ぐと頭を垂れて、深い物思ひに沈み込む。

今しも彼が那賀町の曲り角近くに來た頃、突然後ろから、

「おい、海野君、待ち給へ。」
と聲をかけた者がある、ハツとして振向くと、それは同僚の特務

(30)

「巡査であつた。」

「君、今日は大分什うかしてゐるね、様子が少し變だよ。」
と同僚は笑ひながら言ふ。海野刑事は眞顔になつて、

「僕は什うもしてゐない積りだが……。」

「だつて、今日機密室での君の態度は、眞當に什うかしてゐたよ。
署長殿に向つて、單獨の行動を取らして下さいなんで、外の刑事を
餘り踏み付けてると言つて、中には嘲笑つてゐた者もあつた位だ。
何故君は彼慶事を、言つたのだ。」

海野刑事はさも意外の面持で、

「何故つて、僕には信ずる所があつたからだ、外の刑事と行動を共

(31)

にするよりか、僕が單獨で働いた方が、捜査上便利だからと思つた
までさ、それを笑つたり憤慨されたりした所で仕方が無い。」
「だつて恚う言つては失敬だけれども、まだ新參の君がさ、あの席
上で彼慶廣言を吐く者だから、署長殿も何だか變な顔をして居られ
た、假令君は信ずる所があるにしても、外に敏腕な刑事も澤山にゐ
るのだから、君は差詰一步を譲るべき立場にあると思ふ、之れは僕
が君の親友として、老婆心から忠告するのだから、悪く取つて呉れ
ては困るよ。」

「いや御親切は有難う、併し僕は苟にも彼慶廣言を吐いた以上は、
決してそれを反古にはしない積りだ、素より最初から信ずる所があ

つたのだから。」

「では君一人の手で、今度の犯人を挙げようといふ考へたのかね。」

「同僚は侮蔑するやうな調子で問ひかけた。」

併し海野刑事は愈々真面目になつて、

「うむ、僕は心中窃かに決心してゐる、如何なる困難に遭遇しよう

とも、此の犯人は僕の手で採し出して見る積りだ。」

同僚は忽ち噴き出して、海野刑事の肩を叩きながら、

「君、真逆酔狂で言つてゐるのぢやあるまいね」

「怪しからん、君は大變僕を蔑視してゐるけれども、苟くも刑事が

犯罪の捜査に従事するに際して、此の事件は到底自分の手では駄目

だと、高を括つて掛つて、仕うして完全な成績が上げられるものか
ね、何處までも捜し出して見せるといふ、強い自信があつてこそ、
初めて水火の中をも辭せざる程の覺悟が生じるのぢやないか。」
と彼は些か、同僚の言葉が癢に障つたと見えて、聲を烈ましたなが
ら言ふ。

「いや其の点は同感々々、まあさう憤然になり給ふな、僕は親友だ
からこそ、此麼嫌なこともいふ、君の喜ぶことばかりを言ふのが親
友ではない、だから怒つて呉れては困るよ、詰り君の自信が、其處
にあるのならば將來及ばすながら應援もしよう、仕うか充分に活動
して、名譽の効果を齎して呉れ給へ。」

同僚の巡査は、恚う言ひながら、海野刑事の手を固く握つた。
 「君の親切は感謝してゐる、吃度犯人を捕縛して見せる積りだ。」
 海野刑事も、固い決心の色を現はして、其の手を強く握り返した。
 話しの中に、二人は何時しか那賀町三丁目の角を曲つて、賑かな
 千日前の通街に出てゐた。海野刑事は其處で同僚の巡査と別れて、
 獨りで香具師の露店を素見してゐる連中に紛れ込んだ。

六 有力な手係り

血潮の付いた番傘

「田邊警部殿、一縷の光明を認めたらやうに思ひます。」

今しも調査室で、只獨り熱心に事務を執つてゐる田邊警部の前に、
 スツと顔を出したのは阪本刑事である。

「何、光明を認めたら？」

田邊警部の目は、此の時異様に輝やいてゐた。阪本刑事は捜査か
 ら歸つた儘の、土方に變装した姿で、ドツカリと向ひ側の椅子に腰
 を落して、

「慥かに一ツの手係りだらうと思ひます、兎も角此の品物を御覽下
 さい。」

と言つて、差出したのは、古ぼけて所々破れた、一本の番傘であ
 った、警部はそれを擴げて、つくづく眺めてゐたが、臆て驚いたや

うに、

「血、血が付いてゐるね。」

と叫んだ。

「はい、不審は其の柄に附着してゐる血痕です。實は兇行のあつた其の翌朝、工廠に出勤する途中、職工が横山町の町角で、此の傘を拾つたのです。」

と刑事は得意の色を浮かべながら言ふ。

「成程、あの夜は甚い暴風雨であつた。或は犯人がさしてゐた傘かも知れないね。古くはあるがまだ捨てるには早い奴を、血が着いたものだから、捨てたのだらう。」

「そして其の傘の無印の所が、何よりの證據です。印が無ければ、到底足の付く虞は無いと思つたのでせう。」

「いやそれも一理ある、兎も角疑問は此の血痕だから、果して人間の血か若しくは、獸類の血かは、検査の上で判ることだ。」

阪本刑事は、更に聲を一段と潜ませて、

「警部殿、私は其の傘の製造所を調べる爲めに、市内の傘屋を十軒ばかりも捜しました。すると有難いことには、此の傘は昨年市内の多島といふ隣寸工場から、注文を受けて二十本程造つたものと判りました。尤も此の隅に、丸に多の字の印があつたのを、犯人が破つて除けたものと見えます。」

「警部は之を聞くと、希望の色を満面に湛へながら、
『いや其處まで判れば大手柄だ、すると犯人は、其の多島工場に關係のある者に違いない、其處の職工を調べたら、以外に早く解決するかも知れないね。』」

「所が、彼の工場は職工が全部で二百人から居るやうです。」

と阪本刑事は常惑の表情を浮べた。

「さうか、二百人では鳥渡取調が困難だね。」

と警部も嫌な顔をしたが、

「まあ好いさ、兎も角其の多島工場の方へ、全力を注ぐことにしよう、さすれば何とか手係りを得るだらう。」

七 尾行する刑事

裾の千切れた外套

田邊警部と阪本刑事とが、恰度證據の雨傘を調べてゐた時刻である。

茲人通り繁き那賀町の千日前、所々に香具師が聲を囁らして客を呼べば、工廠の勘定揚句で、懐ろの温かい人々が、物珍らしさうに群衆を築いて眺めてゐる、其の間を縫うて、年頃四十格好の、勞働者風の男が、周章てたやうに過ぎて行く。最前から群衆の中に交つて香具師の口上を聞く風で、絶えずジロ〜と、回邊の様子に眼を

(40)

配つてゐた彼の海野刑事は、此の時素早く例の労働者風の男を發見した。そして何氣なき体で、群衆の中を抜けると共に、足早に労働者風の男を尾行した。

自分を尾行する者があるとは夢にも知らず、件の男はスタ／＼千日前を通り抜けて、那賀町の六丁目から五丁目、四丁目と過ぎて、三丁目の電車線路へ出ると、横町へ曲らうとして、弗と後へ向いた途端、海野刑事の視線とバッタリ出會つた。刑事は透さず聲をかけた。

「鳥渡……失禮ですが……。」

叮嚀な挨拶に、労働者風の男は聊か、面喰ひの體で、

「へい、俺に御用事ですかい？」

「ね、實は……其の貴男の着て被入る外套が……。」

と語尾を濁らして、ツカ／＼相手の男に近寄りながら、其の着てゐる黒羅紗の外套を、穴の明く程眺め出した。件の男は不審の面持で、

「何か俺の着てゐる外套に、異つた所でもあるのですかいかい？」

と自分でも、今更のやうに眺めてゐる。

「裾が千切れてゐるやうですね。」

(41) と刑事は透さず相手の顔を眺めた、瞬間に顔色が變るかと思つたのである。併し相手の男は平氣なもので、

「千切れてるのが、仕うかしたのですかい。」

と迂散臭さうに言ふ。

「いや、別に疑ぐる譯ではないが、實はそれに似た外套が紛失しましたので、若しか貴男が近頃お買ひなすつたものならば、何處でお求めなすつたか、それがお聞き申したいんで……。」

と海野刑事は、定り悪さを押し包んで尋ねた。

「巫談ぢやないせ、盗んだ外套なんか着るんぢやねわや、恁う見ねても俺あもど、上の役目をしてゐた人間でさあ、彼れ此れ十四五年前に着ていた外套を、かうして型を變へて着てるんで、裾が破れてるからつて、お前さんの物と間違はられちやア困ります。お疑ひな

ら手に取つて、どつくりと見てお呉んなせね。」

恁う言はれて、刑事の疑念はサラリと晴れた。黒羅紗で、而も裾が破れてゐる爲に、横山町の被害者が握つてゐた、黒羅紗の切れ端と持比べて、若しやと睨んだものゝ、成程世間に似た品は澤山ある、と考へ直せば、有撃に定りか悪くて堪らない。併し念の爲め手に取つて眺めて、血痕の着いて居ないのを慥かめた上で、

「いや慥かに違ひます、飛んだお粗忽を申して済みません。」

と詫び入つた。

「何だ馬鹿々々しい、お前さんの爲に急ぐ用事が遅くなつちやつた。俺だから好いが、外の者になら、氣を注げなせいよ。」

(44)

と毒口を利ひて、件の男はサツサと行つて了ふ。海野刑事は後に
悄然、腕を組んで思案に沈んだ。

八 あゝ苦心惨膽

署長と警部の會議

横山町に戦慄すべき惨劇があつてから、二日と経ち、三日と過ぎ、
十日にも十五日にも及んだけれど、仕うしたもののか其の犯人は、未
だ捕縛されない。捕縛されぬ處か、何者の仕業とも、見當さへ付か
ないなのである。世にも残忍暴戾を極めた二人殺しの犯人は、抑も
天を翔つたか、地を潜つたか、杳として其の消息を聞かない。或は

(45)

富島家に恨みを抱いて兇行を演じたのだから、犯人は意外の近くに
潜伏してゐるだらうとの説もある。又は彼の怖るべき罪を犯して、
九連の土地に落付いて居れよう筈はない、風を喰つて逃走したのだ
との説もある。何方も耳を傾けるには足れど、肝腎の手係は少しも
得られないのだ。偶々敏腕の刑事が、此奴こそ嫌疑者と引張つて來
た者も、調べて見れば似ても付かぬ人違ひ、此の證據品こそ、吃度
犯人の手蔓だと見込みを付けても、少し調べて行くと、直ぐに行詰
つて了ふ。恚うして九連警察署は、深い暗雲の中に閉されてゐた。
世間の非難攻撃は、次第に火の手を擧げて來る。「横山町の犯人
逮捕未だし」「無能なる九連警察署」など、勝手な題を付けて、新

(46)

聞紙は益々警察に向つて、攻撃の矢を放つ、眠れる警察界、無警察の九連市、とまで市民の口々には、怨嗟の聲が交された。あゝ九連警察署は果して無能なのであらうか、眠つてゐるのであらうか？。否々、九連市三十萬市民の幸福を保護すべく、番町の角に、巍然として聳れた洋館九連警察署の内部には、此の十數日、夜の目も眠らず署員等が具さに臥薪嘗膽の艱難辛苦と闘つてゐるのであつた。神若し人に冷靜な意志と、公平な愛情とを投げかけてゐるならば、如何でか彼等の、苦痛と努力とを、徒らに黙過し得ようぞ。今日も調査室では、小野署長と田邊警部とが、額を寄せて密談に耽つてゐる。

「田部警部、俺は残念ぢや、今日で彼此二十日にもなるが、横山町事件の犯人は依然として捕縛らない、殆んど五里霧中に彷徨してゐる有様だ。若し依然として活動の効果が見れないとすると、獨り小野一署長の恥辱ではない、我が警察界の權威に係る次第ぢや。俺は實に慨嘆に堪へん。」

署長の廣い額に、愁ひの色が現はれてゐた。日頃快活で豪邁な性質であるだけに、夫を眺める田邊警部の心は、千々に碎ける思ひである。」

(47)

「何と申して好いか、自分の不甲斐なさを罵る外は無いのですが、只々人事を盡して、天の助くるを待つ考へです。犯人に翔天地潜の

術が無い以上、何處までも探し出して市民の心を安めるのは、自分の職務、私は固く決心して居ります。

「其の心を聞いて、俺も百萬の味方を得たより嬉しい。世間の非難攻撃も、只我等に對する刺撃劑、昂奮劑と思へば、何で辛いことがあらう、田邊警部、俺は今月の俸給を、悉く刑事に割いて與へようと思ふ。」

「わッ、では署長殿は生活費を割いてまで、刑事を督勵なさる御決心ですか。」

「それも國家の爲ぢや、俸給だけでは幾らもない、幸ひ多少餘財の蓄積もあるから、それも一部を割いて刑事が活動の資に供したいと

思ふ。」

田邊警部は無限の感慨に打たれて、思はずハラ／＼と落涙した。

署長殿、私も兇行の當日から、自分の宅へは一度歸つた限りです。此の犯人が捕縛されるまではと、妻子には外出を禁じて、謹慎させてあります。宿直室の起臥も今日で廿日餘りになります。却つて邪念を拂ふことが出来て好い、署長殿のお志しも、決して無駄にはせぬ覺悟ですから、仕うか御安心下さい。二人が慙うした話に耽つてゐる時、最前から室の外に立つて、密と涙を拭つたのは、外ならぬ海野刑事であつた。

九 昔の夢物語り

花吹雪新婚の二人

小野署長や、田邊警部の苦心の程を聞くに付けても、海野刑事は今更のやうに、自分の不甲斐なさが心外で堪らぬ、先日秘密會議の席上で、署長に向つて廣言を吐き、此の犯人を自分獨りの手で逮捕して見せるなど、固い誓ひを立てたものゝ、省みれば自分には、何等の經驗も手蔓も無い、只力と頼むのは、一片耽々の熱誠あるのみである。日頃から新參者として、同僚に疎まれ、偏狹者として人に譏られてゐた自分が、身内に漲る熱誠の力を試すのは此の時であ

る。何處までも此の犯人を検舉せではと、強い固い自信を抱いて放言したことが、今に至るも實現されぬとは、何といふ淺間敷い事であらうと、徐ろに嘆息の胸を抱いて、今宵も捜査にグツタリと疲れた身体を、我家の寢床に横へた。

妻の絹子は其の枕元に坐つて、冬着の仕度に、セツセと針を動かしてゐる。彼の事件以來、夫は何處へ行くのか、毎夜の如く家を明けて、朝になつてヒョックリ歸つて來くことも珍らしくない。それに毎日の如く、自分と話するさへ臆劫な顔色を見せて、まるで人間が變つたやうに沈み込んでゐる。腹の中には女の知ることの出来ない、職務上の心配が重なつてゐるのだらうが、それにしても連綿

(54)

「遠洋航海さへ無かつたら……。」

「ハ、ハ、ハ、何を言ふ、其の遠洋航海があつてこそ、偶に歸つて来れば此處に楽しいのだ。自分が何時も家にゐて御覽、些とも面白くないのだよ。」

「でも妾、何時も此處氣持で居たう御座いますわ、長い間貴男が家に被入らないと、眞當に淋しくつて、死んで了ひたい位に、思ふことがありますのよ。此の前の航海の時だつて、妾什麼に待ち遠く思つたか知れませんか。」

と女は急に沈み込む。心持火照つた顔に、水の垂るやうな丸鬚の、鬚の後れ毛が濡れて、凄い程艶に美しい。男は歩きながら、惚れ惚れと

と其の顔を見遣つた。

「だけでもお上のことだから仕方が無いし、今度だつて矢張り、獨りで淋しく、お留守番をしなければなりませんわね。」

「心配することはないさ、月日の経つのは直きだから、彼此れ思つてゐる内に歸つて来る、今度こそは俺もズツと色が黒くなつて歸るよ、其の内にはた前も赤ン坊が生れるだらう。益々楽しいぢやないか、ハ、ハ、ハ。」

男は飽まで快活であつた。併し反對に女は沈んで、

(55) 「ねえ貴男、妾不如歸の浪子のやうに思はれて仕様がありませんの、浪子は夫が遠洋航海の留守に、死んで了ひましたわね。」

(56)

「馬鹿々々しい、あれは小説だよ、取越苦勞にも其儘ことを言ふと、人に笑はれるさ、お互ひに楽しい家庭を持ちながら、詰らないことを氣にするものぢやない。」

「だつて人の運命は、一寸先が見えないんですもの、病氣で死ななくつても、人には什麼災禍が巡つて来るかも知れませんが。浪子だつて、伊香保の蕨狩の時は、眞當に楽しい身の上でしたわね。」

女は而も眞顔で言ふ、夫はそれに不快を感じたものか、烏渡顔を曇らせた。よしないことを言ひ出したものと、女は初めて後悔したか、淋しく笑つて、

「ホ、ホ、其儘ことはありませんわね、妾吃度丈夫でゐて、貴男

のお歸りを待ちますわ。」

と言つたが其の裏に、何となく悲しい風情が見えた。此の時四五人の若者連れが、先方からワイ／＼囁しながら遣つて来るので、女は定り悪さうに、夫と別れて身を横に避けた。と其の間に、夫は便所にでも行つたものか、妾が見えない。女は其處に迂路々々してゐると、突然後から、

「春枝さん……。」

と呼びかけたものがある。ハツとして振向くと、紺の帽子を冠つた、色の白い青年が其處に立つてゐた。

(57)

一〇 奴ッ！兇漢め

不思議の夢の暗示

女は一目見るより吃驚して、

「まあ貴男は……。」

と言つたが、有繋は夫ある身の、若い男と言葉を交するへ気が得
めて、周章で逃げようとしたが、青年は猿臂を伸ばして、其の袂を
無圖と掴んだ。

「何をなさるのです、放して下さい。」

と女は身を藻掻く。

「放しません、僕は断じて放しません、春枝さん、貴女は此の僕を
忘れたのですか。」

「いゝね、忘れても、忘れなくつても貴男のやうな方と、お話をす
る必要はありません、妾には夫のある身体です、其處を放して下さい。」

青年は口元に、物凄く笑を浮べて、

「何、夫がある？、ハ、ハ、ハ、夫があつても構はん、僕は僕の職を
尊重する、ねね春枝さん、さうつれなくしたものではありませんまい。」

女はキリ、と眉を逆立て、

失禮なことを仰有いますな、連なくするのしないのつて、妾は貴

男から、其處ことを言はれる義理はありまん。」
 「ま、さう憤るものぢやない、満更知らぬ仲では無いでせう、貴女
 と僕とは同じ村の生れた、幼い時から、また振り分け髪がみの時代から、
 僕は貴女を懐かしい人に思つてゐた、成長するに従つてそれが離れ
 なつた、人知れの戀の煩悶はんもんに、長い月日を送つたのです。併し貴女
 と僕とは身分が違ふ、貴女は土地でも名高い金満家の御令嬢、不幸
 にして僕は……僕は人の賤む穢多せいたの家いへに生れたのです。あゝ天は何
 故人間に、斯くまでの不公平な運命を興へたものでせう。」
 青年は此處まで言ふと、最う堪へ兼ねてか、眼に一杯の涙を溜ためめ
 てゐた。

「賤しい穢多せいたの家いへに生うまながら、而も身分違ひの戀をしたのが僕の
 因果いんぐわです。片戀の胸を抱いて、僕は淋しい月日を送りました。併し
 貴女は遂に海軍中尉の、令夫人となつて了ふ、僕は當然、失戀に泣
 く身となり果てました。僕は如何に辛い悲しい思ひをしたか、怒なじ
 僕を天が生みさへしなかつたらと、其後といふものは、運命を呪のろひ
 世を呪のろひ、果は怖しい罪人となつて、今では日蔭者の身体です。春
 枝さん、これほど思ひ詰めた僕が、如何にか貴女を忘れることが出
 来よう、遂うく九連の土地へ追かけて、貴女の家を捜し當て、心
 の丈を手紙に通はしたのも、幾度であつたか、然るに貴女は、少し
 も僕の心を察して下さらない、蛇蝎だかつの如く忌み嫌つて、今日も今日

とて出會ひながら、言葉もかけずに逃げるとは、何といふ情ないお方でせう、春枝さん、後生ですから、僕、僕の戀を容れて下さい。」
諄々と口説き立てた青年の面には、冒すべからざる決心と、物凄
い殺氣とが漲つてゐた。女は只怖しさに、ブル／＼と顫るばかり、
青年は尙も女の手を、緊と握つて、

「春枝さん、お願いです、僕のお願ひです。」

女は静かに顔を上げた。

「お心は察してゐますけれど、それは幾ら仰有つても駄目、夫の無
い昔ならば兎も角も、今は人妻の身体です、貴男と言葉を交すさへ、
妾の潔白を疑はれるかも知れません、仕うか其處を放して下さい。」

「では仕うあつても、僕の心には従はれないのだな。」

青年の顔は此の時眞青に變じてゐた。

「最う之れまでだ！」

と叫んで懷中に手を入れた。其の途端、キラリと閃めいたのは、
見るも恐ろしい出刃庖丁である。

「あれ、何を、何をなさるのです。」

と逃げんとする女を、後から襟髪引摺んで、青年は出刃庖丁逆手
に首筋目蒐けて、柄も通れと刺し込んだ。

雪のやうな頸筋から、眞赤な血潮が、サツと迸り出た。其の血
潮は、見る／＼曇一面を唐紅に染めた。爛漫たる櫻の園と思つた

のは、何時の間にか、電燈仄暗い畳の上と、變じてゐたのである。傍には青年が、庖丁の血振ひをして立つてゐた。

* * * * *

「奴ッ、兇漢め！」

海野刑事は、矢庭に叫んで飛付いた。

「まあ貴男、何を仰有るのです、吃驚するぢやありませんか。」

其の聲は妻の絹子であつた。海野刑事は弗と眠を醒した。自分は矢張り自宅の寢間に、獨り寝てゐたのだ。

夢！、さては今のは夢であつたか。

「俺は今、夢を見てゐたのだ。」

絹子は笑つて、

「ホ、ホ、何だか知りませんが、突然に大きな聲を出したりして、妾吃驚しましたよ。」

「俺も全く驚いた。」

刑事は起きて背伸をした。夜は最う大分更けてゐる。

一一 色の青白い男

番傘と外套に目星

海野刑事は、今年三十三の青年である。何方かと言へば、偏俠で

片意地に生れ付いた彼は、親友といふものが極めて尠い。其の妻の編子を、媒介して呉れた恩人として、又唯一無二の先輩として、親友として、彼が今日まで杖とも柱とも頼むのは、九連警察署の、同じ司法部に勤める松江巡査部長であつた。

彼は困つたことが出来る毎に、松江部長に相談して其の智恵を借りる。部長も同じ年輩の、豪膽快活な青年であるが、海野の性質を好く吞込んで、彼の一舉一動に就いて諫めもし、又薦めもする。二人の仲は圓滿な署内にあつても、殊に情誼の濃かなものがあつた。今日も松江部長は、海野の勝れぬ顔色を見て、事務の暇に署内の別室へ呼んだ。

君は近頃馬鹿に沈み込んでるぢやないか。」

と慰め顔に、業と元氣な調子で、

「犯罪の捜査といふ奴は、何時もクヨクヨ考へて居ては、出来るのぢやない、最も大膽に敏速に、事に臨んで頭腦を働かせなくてはならん。君は餘り物を深く考へ過ぎるから不可んよ。」

海野刑事は感謝の色を浮べて、

「いや有難う、無論今度の捜査は、随分大膽に遣つてる積りですが、仕うも少しも効果が見えななので、實は弱つてゐるんです。」

「では少しの手係りも見出さないのでかね。」

「全く自分の不甲斐なさにも呆れて了ひますよ。」

「併し其麼弱い音を、吹いてゐたのでは、署長殿に對して申譯が
るまい、如何なる困難に遭遇するとも、貫いて行く覺悟でなくては。」
「それは覺悟してゐます。所が今の處では、果して何の方面に活動
して好いものか、それさへ見當が付かなくなつてゐる位です、部長殿、
何とか好い工面はありませんか。」

部長は暫らく考へてゐたが、

「左様、當度なしに捜査が出来るものではないが、先づ證據として
は過日、阪本刑事が発見した番傘と、被害者の手に握つてゐた羅沙
の切と二つだ、番傘の出所から見ても、多島燐寸工場を探るのが順
序だらう、其の内に羅沙の切れ端も、破れた外套など、見當り次第

調べるさ、それから今一つは、世間の噂から意外な手蔓を得ること
があるものだ。先づ變裝でもして、大勢人の入込む處へ出沒するの
も一方法だね。」

松江部長の言葉を、熱心に聞いてゐた海野刑事は、此の時ボンと
膝を叩いて、

「部長殿、それに就て僕は妙なことがあるのです、實は昨夜變な夢
を見たのですがね。」

と彼は俄かに俯向いて夢の記憶を辿つて行く。

「夢？、什麼夢だ。或は夢とても馬鹿にもならん。豫感といふ一種
の精神作用が、時として偶然にも當ることがあるものだ。まあ話し

(70)

て見給へ。」

「それが實に不可思議極まる夢なのです、何でも公園のやうな所だつた、恁う若い海軍士官らしい夫婦が、陸まじく散歩してゐると、其處へ色の青白い青年が遣つて來ましてね、春枝さん、と言つて其の妻君を呼び掛けるのです、慥か横山町の被害者も春枝と言ひましたね、すると其の妻君は、嫌つて逃げようとするのを、青年は追絶つて、執念く口説くのです、揚句が口論になつて、妻君は嫌だといふ、青年は遂々く懐ろから出刃庖丁を出して、其の妻君を殺して了つた。それが公園だと思つてる内に、何時しか座敷になつてゐたのです。部長殿、實に不思議な夢ではありませんか。」

(71)

部長は黙つて聞いてゐたが、

「それは全く妙な夢だ、或は君が平常、失戀の結果の兇行だと睨んでるので、その想像が夢になつたのだらう。」

「所が夢に出た其の男は、思ひも掛けない穢多なのです、特殊部落民だと、其の男が自分の口から言ふんです、如何にも僕は、其の夢が事實のやうに思はれてなりません。」

「僕も何だか妙に思ふ。」

と松江部長も笑つた。

一一 星月夜の人影

餛飩屋は其實刑事

時雨を載せた雲脚が、犀ヶ峯の邊りから、西へくと道を急いで、遙かに霞浦、繪田の山々へ運び去ると、あとは臙げながら星月夜、二澤山の紅葉を振り落した風が、二澤川の砂を曝して、橋上の夜は身を切るやうに寒い。

河岸に添うて廣々たる煉瓦塀の建物、幾本もの煙突が、雲を突いて聳ねてゐるのは、二百有餘の職工を收容する、多島燐寸製造工場である。晝は器械の音、作業の聲、騒然たる工場内も、夜更けては死んだやうに静まり返つて、其の宏莊な建物を、朧ろ月が寒さうに照してゐるばかり、電車の往復も先刻途絶えて、九連でも街端れの

此の邊りは、人ツ子一人通らない。

其の静かな工場の、煉瓦塀の頂邊に、今しも何者か蠢めいてゐると見る間に、忽ち猿の如くヒラリと地上に飛び降りた様子、すると塀の外にも、黒い人影があつて、今飛び降りた怪しい者と一團になつて、暫らく蠢めいてゐたが、臙で遠はたゞしく駈出したのを見ると、慥かに二人の人影である。一人は片手に風呂敷包みを提げてゐたが、臙で二澤橋の近くに來ると、駈足を止めて鳥度後ろを振り返りながら、今度は悠くり歩き出した。

此の短時間の出來事は、誰さへ知る者はなかつた。併し二人が二澤橋を渡り切つて、番町に差蒐つた時、弗と先方から、薄闇を照す

(74)

提灯に、墨くろくくと「うごん、そば」と書いたのを目印に、夜泣き餛飩の荷を擔いだ男、行き會ひ様にバツタリ、二人の姿に衝當らうとして、危く横に避けた。

「馬鹿野郎、氣を付けろ。」

と風呂敷包を抱へた男が、小さな聲で毒付いた。餛飩屋は弗と振り返つて、二人の後ろ姿を眺めたが、何故か暫らく其の眼を放たず、一心に嘖めてゐた。併し二人はスタくと番町筋を歩いて、懸て關に其の姿は見えなくなつた。

餛飩屋は又一頻り鈴を鳴らして、二澤橋を渡り、西本町へ差蒐ると、一際大きな聲を張り上げて、

「わゝ鍋焼きい……い。」

と叫んだ。すると彼方の闇の中から、突然と姿を現はした男、定かには判らねど、烏打帽を冠つた商人体である。彼はツカ／＼と餛飩屋の傍へ立寄つて。

「おい、餛飩屋！」

と呼んだ。

「へい、何を差上げませう。」

と餛飩屋は腰を屈める。

「いや俺は餛飩は不要ない、併し君、随分熱心に働らくねわ。」

「いねもう、ぼつ／＼ですよ。」

(75)

「さうでない、其の位の熱心がなくては、職務は勤まらないぞ。」
「わゝッ。」

「いや隠さなくても好い、俺は知つてゐる、おい海野刑事、君は實に見上げた人だ、君の如き警察官があればこそ、我警察界は永久に威厳を保つことが出来るのだ。俺は感謝するよ。」

鯉鮓屋は恚う言はれて、提灯の明りに相手の顔を透して見た。

「私を見破りなすつた貴男は？」

「おゝ田邊警部だ、君、俺も矢張り君と同じやうに、恚うして苦心をしてゐるのだ。」

と田邊警部は帽子を取つた。鯉鮓屋は果して海野刑事であつた。

彼は意外の感慨に打たれながら、

「さうでしたか、些とも知りませんでした、警部殿さへその御苦心、況して私共が、此の位のことをするのは當然です。警部殿、國家の爲と思へば、鯉鮓屋位少しも辛いことはありません。」

「好く言つて呉れた。併し君、鯉鮓屋に化けるといふのは、何か目的があつてのことかね、少しは手係りを得たのか。」

恚う言はれると、海野刑事は急に打消れて、

(77) 其の手係りは未だありません。最早詮術も盡きた結果、窮餘の一策として、鯉鮓屋になつたのであります。只世間の噂を聞いたたり、又は夜の商賣ですから、意外の手蔓を得ようも知れないと存じて、

此麼姿こんなすがたになつたのです。

田邊警部たへべは領首うなづいて、

『結構けつこう々々、君きみの其そのの熱誠ねつせいに對たいしても、神かみが決けつして捨すてはしないだらう、仕さうか幸さいひに充じゅう分の効果かうくわを齎もたらして呉くれ給たまへ。』

『はい、有難ありがたう御座ございます、吃度きつど犯人はんじんを捕縛ほぼくする覺悟かくごです。』

『では俺わしは失敬しつげいする、之これから本署ほんしょへ歸かへるのだ。』

と田邊警部たへべは饅飩屋うぜんやと別わかれた。後あとには肌寒はたさむい夜よの寂幕せきはくを破やぶつて、鍋焼なべやきうごん……の聲こゑが哀あはれに聞きけた。

一三 一人は聾啞者

竹梅樓ちくばいろうへ二人ふたりの客きやく

それから二三日にちを経たつた夜よるのことである。此處こゝ本町九丁目ほんまち とうりゅうめの、活動くわつどう常設館せうせつくわん世界館せかいくわんは、一週しゅう一度どは寫真しゃしん替かりとして 觀客かんきやく雪崩ゆきなだを打うつて詰つめ込こみ、八時頃じころに早はやや大入おほいり満員まんみんの札ふだを掲かげたが、其そのの二階にかいの特等とくとう席せきに陣取じんぐつて、人混ひんごみに押おされながら、熱心ねつしんに寫真しゃしんを見物けんぶつしてゐる二人ふたりの青年せいねんがあつた。

寫真しゃしんは新派悲劇しんぱひげき『心の底こころのそこ』といふので、觀客かんきやく席せきでも殊ことに婦人連中ふじんれんちゆうは、終始しゅうし袖そでを顔かほに當あて、啜すすり泣なきの聲こゑを漏もらしてゐたが、二人ふたりの青年せいねんは只黙々ただもくもくとして眺ながめてゐた。するとそれも濟すんで、泰西たいせい活劇くわつげきになると、何なんでも阿米利加あめりかの名探偵めいたんていが、兇賊けうてくの爲ため神出鬼没しんしゅつきぼつの惡事あくじを働はた

かれて、非常に苦しめられるといふ筋である。之を眺めると二人の青年は手を打つて興に入つた。

廳でそれも濟んだ頃、二人は言ひ合して、人いきれのする館内を出た。外には皎々と電燈が晝のやうに輝やいてゐる。其の下に立つて、看板繪を見てゐる人々の中を抜けて、二人は電車筋に出ると、廳で兎ある横町の、「さつき庵」と圓い瓦斯燈に書き出された、小さな料理屋に入つた。

女中の案内で直ぐと二階に上ると、酒肴を注文して女中を階下へ降した。

『おい、一時間ほど飲んだら、彼方へ行かうせ。』

と一人が言へば、相手の男は黙つて頷首いた。言ひ出した男は年頃二十四五、色の青白い、ノツペリとした俳優面であるが、其の眼が嫌に鋭く勤くのと、口元に賤しい處の見ゆるのが特徴である。相手の男は少し年下の二十二三、之も色は青白く、お負けに脊が低くつて、眼が低能のやうにドロソとしてゐる。そして何を言はれても黙々として、時々手真似で其の意志を示す所を見ると、何でも啞者のやうである。

『さあ、女中の來ない内に、現金を分けて遣らあ、過日の仕事は五十圓ばかりさ、豪氣なものだらう、お前も俺にさへ附いて居れば、旨い酒も好きな女も、勝手氣儘さ、勿で過日の分け前を十五圓遣らう、

「什うだ不足は無いだらう。」
と年上の男は懐中から、鱷皮の紙入を取出して、澤山の紙幣の中から、五圓札を三枚、眼の前に突き出した。すると相手の男は何と
思つたか、急に頭を横に振つて、指を五本出して、更に又二本出
て見せた。

「何、五圓足して二十圓にして呉れろつて？我儘を言ふものぢやな
い、十五圓あれば澤山だ。」

と呟やいて、手を振つて見せた。そして注意深く、隣室を覗いて
聞く者の無いのを慥かめた上で、

「過日の仕事だつて、皆な俺にして貰つた癖に、我儘を言つてやが

る、尤もあの時は、すんでのことに餛飩屋に怪しまれる所だつた。
俺の仕事も樂では出来ないや。」

と呟やいて、彼は相手に怒つた顔をして見せた。啞者らしい男は
黙つて、十五圓の紙幣を紙入に藏つた。

聽て女中が酒を運ぶ。二人は好い氣持に酔拂つて、「さつき庵」
を辭したのは彼此れ十一時頃であつた。

二人は電車に乗つて、春日遊廓の裏門に近い、終点に下りた。そ
してプラリと遊廓へ、素見の連中に交つて、軒別格子先から覗いて
歩いたが、聽て竹梅樓と行燈に出てゐる妓樓へ、ズツと入つて行つ
た。

一四 御用だ待てツ

此處では辻占賣り

「まあ金さん、眞當に忘れないで、好く来て下すつたわねね。」
 年上の男が啞者と別れて、部屋へ入ると等しく、續いて入つた女
 が、心から嬉しさに言ふ。源氏名は染吉と言つて、此の妓樓での
 特等女郎、金さんと呼ばれた男とは、古くからの馴染と見た。
 「俺は忘れずに遣つて来たが、た前こそ忘れて了つてゐたのだらう」
 「あら、巫談ばかり、それア外のお客の言ふことよ、貴男ばかり
 は最うく、寝た間も忘れることが出来ないの。」

「旨く言つてやがらア、其の手で見すく騙されるんだ、俺だつて
 騙されて、恚うして二年越に通ひ詰めるんだ。」

「騙すなんて人間きの悪い、さういふ金さんこそ、妾を騙す積りな
 のでせう。」

「馬鹿を言へ、まあ来る早々、痴話口説も見つともない、今夜は久
 しぶりに楽しく遊ばう、た前も氣には入らないだらうが、之でも客
 の一人だと思つて、まあ世間並に可愛がつて呉れ。」

「其の言ひ種が癢たわ、何で妾が、金さんを外の客のやうに思ふも
 のですか。」

(85) 『それを聞いて有難い、心の内では拜んでゐるよ。』

「ホ、、、手が付けられない。」

二人は打ち興じて、這麼對話を續けてゐる。廳で染吉が鏡台の前に坐つて、白粉を落してゐる間を、男は長火鉢の前に大安坐、染吉の長煙管で、刻み煙草の白梅を、スバリ／＼と燻らしてゐる。狭い四疊半の片隅に箆笥があつて、其の前の衣桁に縮緬の長襦袢がヒラリ、眞赤な裏を返してゐて、室の中には艶めかしい白粉の香が漂つてゐた。

「ねね金さん、襦袢とお着更へなさいな、それからお酒を呑むのだつたら、早く階下へ言つとかないと不可ないわ。」

染吉は張り店の濃い白粉を拭ひ落して、其の代りに薄すと香の

高いのを刷毛で叩いて、長襦袢の儘、しどけない姿で長火鉢の向ふに坐つた。

「酒は飲んで来たから好い、それよりか酔を醒す爲めに、少し歩いて来よう、お前一緒に往くだらうね。」

「何處へ？」

「遊廓を一廻り、グルリと歩いて来るさ、ね好いだらう。」

「それも好いわ。」

夜は最う更けてゐた。裏二階で弾く爪弾きの端唄、鍋焼うどんの寒さうな鈴の音、一頻りごよめいて行く客の聲、それ等が交る／＼聞えてゐる時、夢のやうに流しの義太が、三十三間堂の木遣りの一節

(88)

を、高い調子で弾いて来た。染吉は其の憐れつばい絃の音に、凝つと聞き惚れながら、泌りして、

「眞當に何時聞いても好い調子だわね、妾彼を聞くと、身につまされて悲しくなるのよ。」

男も同じやうに聞き惚れながら、弗と深い溜息を漏したが、何だか嫌なことでも思ひ出したやうに、俄かにブル／＼と身を震はした。

「詰らないことを思ひ出しちやつた。彼聲音は聞かない方が好い、静かな所は嫌だ、賑やかな遊廓を一度歩いて来よう。」
「ぢやア一緒に行きますわ。」

(89)

染吉も立上つた。男は襦袍を着て、染吉は長襦袢の上に羽織を引かけて、ブラリと妓樓を出た。

春は美しい植込みの、櫻の樹々も冬枯れて、空には凍て付いたやうな寒月が、冷たい光りを投げてゐた。

二人は話しながら、中筋から上筋をグルリと廻つて、下筋に差寄つた。更けてはゐれどぞめきの客はまだ一杯である。

「妾、何時まで此麼勤めをしてゐなければならぬんでせう、早く世間へ出たいわ、ねね金さん、吃度貴男の家内にして呉れて？」

染吉は泌み／＼といふ。

「勿論、二人は末の末まで夫婦だよ、お前さへ變らなければね。」

「妾什麼ことがあつても變らないわ。」
「俺だつて、お前と逢ふ爲には、随分無理な工面もしてゐる、いやそれはかりぢやない、お前の爲には怖ろしい……。」
と言ひかけて、弗と四邊を見廻した。此の時又ツと、横合から首を突出した男がある。

「へ、旦那、濟みませんが辻占を一枚……。」

「何だ汝か、突然に吃驚した、辻占なら用事は無い。」

と言ひ捨て、行き過ぎようとする。其の後ろから大喝一聲、

「御用だ、待てッ。」

ハツと思つて男は振り返つた。併し辻占賣の外には誰も居ないか

ら、さあらの体で、

「お前か、待てと言つたのは……馬鹿々々しい、巫談なら好いが、大きな聲を出すものだから魂消つ了ふ。」

辻占賣は又呷に頭を下げて、

「へ、へ、へ、仕うも濟みません、いね何に、つい聲色の稽古をしましたんで……。」

ぞめきが又一頻り、大聲に囁して過ぎた。

一五 愈々五里霧中

九連警察署の暗雲

十日、二十日、三十日、五十日と過ぎてても、横山町の恐ろしい人殺し犯人は判らなかつた。僅かな手蔓を得ても、少し捜査の手をゆるめると、直さに行き詰つて了ふ。さしものに敏腕な刑事連も、之れにはほとく愛想を盡して、昨今では最う半ば匙を投げた形である。海野刑事は今日も遣る瀬ない胸を抱いて、悄然と刑事室に閉ぢ籠つてゐた。そして捜査の手蔓を、それからそれへと考へ續けてゐる時、給仕が突然遣つて来て、署長のお召だと告げた。何事であらうと、海野刑事は胸をドキ付かせながら、署長室に入つた。

「ま、懸け給へ、少し訊きたいことがあつたものだから……。」

と署長は打解けて例の濃い髭を撫で廻した。「外でも無いが、例の横山町事件さ、少しは見當が付いたかね。」署長の言葉は極めて穏やかであるが、聞く海野刑事の胸には、五寸釘を打込まるゝ思ひがする。「は、實の處其の事件で、引續き活動して居ますけれども……。」「それで少しは目鼻が付いたかと訊くのぢや。」「は、實はお恥かしながら、今に至るも手係りを得ませんです。」と刑事は差俯向く。「君と俺との間には、捜査の當時約束があつた筈ぢや、誓つて此の犯人は、私が捕縛致しますと、君は多くの刑事の面前で言つたこと

を覚えてゐるか。

「はい、決して忘れは致しません。」

「それで君は今尙少しの、手係も得て居ないのか。」

「實に申譯ありません。」

海野刑事は穴にでも入りたい心地がする。

此處苦言を並べる署長の心は、決して海野刑事を苦しめる爲でもなく、又侮蔑しての言葉でもない、只其の氣を勵ます昂奮劑として與へるのであるが、海野刑事に取つては、それが實に例へやうもなく苦しいのであつた。

「若し君が此の犯人を、逮捕し得ない時は、俺は兎も角、多くの刑

事は如何に思ふであらうか、君の廣言は只、徒らに出鱈目の法螺を吹いたものと思はれる外はあるまい、俺はそれが残念ぢや、仕うかして君に手柄をさせたいと思ふ、然るに今日まで、何等の手係りを發見し得ないといふことは、實に遺憾千萬ぢや、併し、併し今後に於て如何なる吉報を得るかも知れない、仕うか氣を落さないで、最後まで充分の活動を續けて呉れ給へ。」

海野刑事は深く打沈んでゐたが、聽て決心の面を上げて、

「判りました、署長殿のお言葉は、海野刑事肝に銘じて忘れません、

吃度、吃度犯人は遠からず逮捕して、お目にかける覺悟です。」

「好く言つて呉れた、其の言葉は俺も忘れないぞ。」

署長も語尾を強めて言つた。海野刑事は署長室を辭すると共に、相談相手の松江巡査部長の處へ行つた。そして署長から言はれた事の一仕始終を語つて、

「僕は實に残念です、同情ある署長殿のお言葉を聞くにつけ、僕の不甲斐なさが、残念で堪りません。」

松江部長は静かに笑つて、

「其處に君の敵愾心があるのです、其の心を持つて事に當れば、何事も成功せぬ筈はない、署長殿の言葉は君に對する刺戟劑なのだから、決して悪く取つては不可ない。」

「勿論です、誓つて僕は最初の廣言を反古にはしない積りです。」

「何か其後手係りは無かつたかね。」

海野刑事は一段と聲を低めて、

「實は過は妙な者を發見しました、それは私が變装して、春日遊廓で辻占賣になつて歩いてゐました所が、何時かお話をした、夢に見た青年と素敵に好く似た男を發見したのです。それが而も二人連れで、竹梅樓に登樓したのですが、程なく其の男は女郎と二人で廓内を散歩に出ました、其の後ろを尾行して見た所が、何でも此の金は普通で拵へた、金ではないなど、言ふのです、怪しいと思つたら、御用だツ、と聲をかけたが其の男は別に驚いた様子も見えないので、遂うく見遣して了りました。」

松江部長は凝乎と聞いて、

「それは怪しい、君が何時か二澤橋の附近で、夜半出會つた男といふのも慥か二人連れだつたね、すると今の話の遊廊へ上つたのも二人連れ、而も其の男の一人が夢に見た青年に似てると言へば、如何にも其の間に因縁がありさうぢやないか。」
憊う云はれると、海野刑事も礎と膝を叩いて感心した。

一六 二度目の惨劇

出刃庖丁をブスリ

二澤山の紅葉も散つて、有明月が寒天に凍て付く冬も過ぎ、聴て

彌生の櫻は人の心を浮立たせるが、其の歡樂の夢さへ醒めぬ内、二澤の土手に螢が飛んで、蟬の聲に夏を知り、庭の桐の葉が濡れると、名さへ淋しい秋となり、隙行く駒の足早しも古い譬喩ながら、一年経つのは束の間、彼の横山町事件があつてから、早くも一年振りの同じ月は来た。

九連警察署では此の一年間を、彼の横山町事件の爲め、陰に陽に惱まされ通したのであるが、それと反對に當座は躍氣となつて攻撃し非難してゐた世間の噂も、七十五日が過ぎると漸次口にする者も尠くなり、昨今では全く世間の記憶から取去られたかの感があつた。
今日晝過ぎから吹き出した烈風は雨を交わて、恰度一年前の、憊

劇を偲ばせるやうな夜である。活動寫真も先刻閉場て、本町、那賀町邊りの目抜き場所へ、人の往來も弗つとり途絶れた時刻、茲本町九丁目の、料亭『さつき庵』の暖簾を潜つた二人の男があつた。

一人は緋の袴を着した、色の青白い青年で、今一人は頬骨の高い脊の低い啞者、と此處まで云へば、讀者は記憶を呼び起すであらう、過ぐる夜世界館から出て、此の『さつき庵』に上り、春日遊廓へ繰込んだ青年のあつた事を、此の二人は實に彼の時の二人であつた。此の雨風の夜とて、『さつき庵』には外に客も無かつた。二人は二階に上つて、手眞似で何事かを相談したが、聽て小一時間も経つ

た頃、好い酔い心地になつて其處を出た。二人は雨風の烈しい夜道を、遅くまで其處此處と歩き廻つたが、聽て午前二時半といふ時刻、天は一面墨を流した如く暗黒に、雨は篠を突き、風は叫びを擧げて狂ひ廻る中を、茲那賀町九丁目の、兎ある眞暗な路次に、忽然と影の如く二人の姿が現はれた。素より此の眞夜中、此の暴風雨に誰さへ此處を通つて、此の姿を見る者は無かつた。

嚴重に戸締りされた表には、灯の消ひかゝつた瓦斯燈に、『雜貨商小村』と書き出された、間口四間程の二階建の家がある。前は小さな流れ川で、裏には又汚い下水溝を隔て、裏向ふの家の勝手場と相對してゐる。其の下水溝の側に、先刻の二人は歩み寄つた。

聽やがて脊せいの低ひくい男をとこは、小村家こむらけの裏手うらての板圍いたかこひを、輕々かるくと越こわて家うちに忍しのび込んだ。續つづいて緋かすりの袷あわせを着きた男をとこも忍しのんだ。此この時とき二人ふたりは兵兒へいこ帶おびを以もつて、其その面體めんたいを包つんでゐた。間まもなく音おとを忍しのばせて裏戸うらどを明あけ、座敷ざしきに上あつたが階下したには誰たれも寝ねてゐない、二人ふたりは更さらに覺音あしおこを盜ぬすんで二階にかいの段梯子だんはしごを登のぼつた。

「おや、誰たれだわ？」

不意ふいの覺音あしおこに驚おどいてか、忽たちまち女をんなの叫さけび聲こゑが聞きけた。二人ふたりはハツとして顔かほを見合みあはせたが、先まに立たつた緋かすりの袷あわせを着きた男をとこは、矢庭やにわにツカ／＼と上あつて、折柄せりから六疊むつの室むに獨ひり寝ねてゐる此この家やの主婦しゆふの、咽喉のど元眼もこめ蒐がけて、夜目よめにも著しる庖丁ほうてうの刃はをキラリと閃ひらかせた。

「あれッ、人殺ひころし！」

と氣魂けたまましく叫さけんだが、折柄せりからの風雨ふううに紛まれて、誰たれも聞きく者ものは無なかつた。

「奴うぬッ、手抗てひかひ曝さらすと承知しょうちしねぞッ。」

續つづいてキラリ刃物はものが輝かがやくと見る間まに、主婦おかみの咽喉のどから、眞赤まつかな血潮ちほがサツと迸ほとつた。これを見みて脊せいの低ひくい男をとこは、後うしろに堂どうとばかり打倒うちたほれた。

「間拔まぬけめ、血ちを見みて腰こしを抜ぬかす奴やつがあるか、此この女あまを押おさへて居ゐろ。」刃物はものは續つづいて、キラリ／＼と振り廻まされた。女をんなは散ちばら髪かみになつて、無二無三むにむさん男をとこの腕うでに武者振むしやぶり付き、刃物はものを撈もぎ取とらうと焦あせるけれ

ごも、急所の深手に目が晦んで伸ばす、腕は所嫌はず切り立てられ、血漸は顔からも、手からも、咽喉からも、ダラ／＼と流れ落ちた。

『まだ斃らねわのか、此の女ッ。』

と叫んで、最後に咽喉に加へた一突きは、見事に氣管を切断して女はバツタリ蒲團の上に倒れた、全身の血潮が悉く流れ出るかと思ふばかり、蒲團を染め、壘を血の海と化し、段梯子までも濡れ落ちた。其の光景は實に筆舌の盡し得ぬ程、酸鼻を極めたものであつた。

聽て庖丁の血顔ひをした青年は、冷やかに打笑つて、

「へ／＼、遂／＼斃つた、人殺しつて奴は實に氣持の好いもの

だ。』

と呟やいて、さて庖丁の血潮を蒲團で拭つた。脊の低い男は、此の時まで傍でブル／＼と震わてゐた。

「やい間抜け野郎、早く金を取る算段をしろツ。」

恚う言つて右手の指で、丸を拵らへて見せた。

『うむ。』

どガツクリ領首いて、脊の低い男は漸く立上り、屍骸の枕元を探して、一個の鍵を取出した。そして相手を案内して階下に降りた。

鍵は階下の箆筒を明ける爲めで、中から手提金庫を引出すと、更に蓋を捻明けて、一掴みの紙幣束を出した。脊の高い男は相手の示す

燐寸の明りで、ザツと勘定して、
「金は二百圓餘りだ、さ、當座の小遣ひに之を遣る。」
と彼は十圓札四五枚を脊の低い男に握らした。慙うして遣てず、
騒がず、二人は悠々として、再び裏の板圍ひを越えて外に出た。風
雨は依然として猛り荒んでゐた。

一七 あゝ血潮の海

由々しき強盜殺人

此の大慘劇の一家は、那賀町九丁目七八年前から、雜貨商を營
んでゐる小村源一の宅で、夫婦水入らずの共稼ぎ、主人は工廠の技

手を勤めて可なり交際も廣く、妻君は宅で店に坐つてゐる傍ら、仕
立職を營んでゐるので、金はドシ／＼溜る一方、それに主人の人望
も厚いから、町内でも名望家として立て敬まはれてゐた。それが如
何なる不運の巡り合せか、主人は昨夜外出しての不在中、妻君が獨
り二階に寝てゐた所へ、不意に兇賊は襲ひ來つて、世にも戦慄すべ
き殺人強盜の兇行を演じたのであつた。

翌朝の六時頃、仕立職人として此の家に通勤してゐる高村正藏と
いふ男、例の如く辨當箱を提げて遣つて來たが、平常ならば起きて
ゐる筈の小村の宅では、嚴重に戸締りをして寝てゐる様子なので、
彼は早速隣りの家の妻君に尋ねた。尤も此の男は性來の啞者である

から、巧みに手似真を以て戸の明かぬ由を告げた。隣家の妻君は眼を圓くして、

「まあさうかわ、それは訝しいね、仕うして朝寢をなさるんだらう。」
 憊う呟やいて、啞者の正藏と一緒に、裏口へ廻つたが之れも嚴重に締りがしてあるから、明かう筈もない。妻君は大聲を上げて呼んだが家からは何の返事も無かつた。

「外に出られる筈もなし、聲のしない所を見ると、餘程好く寢んで被入ると見える。」

と妻君は何となく胸騒ぎがするので、開き戸を色々工夫して、漸く捻ぢ明けて家に入つた。そして廊下へ上らうとする時、其處に夥

だしく血潮の滲れてゐるのを發見した。

「おや、血、血が滲れてる！」

憊う叫んだ儘、妻君は忽ち顔色も眞青になつて、ガタ／＼震れ出した。

「吃度何事か起つたに違ひない、早く交番所へ届けよう。」

と最う座敷へ上る勇氣もなくて、其の儘啞者と一緒に、本町の巡查派出所へ駆付けた。

(109)
 「大變で御座います、彼所の小村さんの家に血が……血が大層こぼれてゐるので、吃度人殺しに違ひありません、早く来て下さい。」
 血相變つて注進したので、詰合の巡查も眉を寄せながら、

「兎も角行つて見よう。」

と啞者と三人で、又小村の家へ遣つて来た。成程届出の通り血が
落ちてゐる、更に襖が倒れてゐる。尙も奥へ入ると、何となく血腥
さい臭氣がブンと鼻を突く。

「此の二階が怪しい。」

とつぶやいて巡査は遠慮もなく、スター／＼梯子段を上つて行つた。
勿論梯子段にも夥だしい血が流れてゐるが、二階に入ると同時に、
凄惨を極めた女の屍体の横はつてゐるのを眺めて、

「呀ッ。」

と叫んだ儘、暫らくは明いた口が塞がらなかつた。此の時傍に眺

めてゐた啞者は、俄にブル／＼と震れ出した。

「慥かに他殺だ。」

巡査は突然恚う叫んだ。そして稍落付きながら隣家の妻君に向つ
て、

「私は之から直ぐに本署へ報告しますから、誰も二階へ上らせては
不可ない、又此の室の中の物に、指を觸れても不可ませんぞ。」

恚う言ひ捨て、巡査は直ぐに派出所へ歸つた。そして入違ひに
別の巡査が又小村の家へ駆け付けて、裏表の出入を固く禁じ、物々
しい警戒を始めた。

程なく報告に依つて、九連警察署からは松江巡査部長が、二人の

刑事と一緒に出張して調べたが、由々しき強盗殺人事件で、而も犯人は何者とも知れないといふので、更に小野署長、田邊警部を始め、多数の敏腕な刑事連が詰めかけた。勿論其の中には海野刑事も交つてゐた。

一八一 縷の光明？

彼は何を考へたか

彼の昨年の秋、横山町に不可思議な殺人事件が起つてから、其の犯人も未だ逮捕されない矢先、又々此の事件が起つたのであるから、市中の人心は恟々として、果ては警察の存在を疑ふ者すら現はれ出

でたのも、又是非ない次第であつた。
小野署長は只管に煩悶を續けた。自分が司る警察署の管内に、一度ならず二度までも、犯人の不明な人命犯を出したことであるから、社會の非難、攻撃が自分の一身に集まつてゐることは克く知つてゐる。而も犯人の捕縛らない以上、其の非難に辯駁し、其の攻撃に反抗することの出来ないのを、返すくも遺憾に思ふのであつた。充も今回の事件では、横山町事件の如く證據品の蒐集に困難を感ずることは少かつた。即ち現場に落ちてゐた兇器が、小村の宅の品でないこと、且つ被害者が反抗する際、相手の兵兒帯を掴んで、其の切れ端が残つてゐたこと、犯人の足袋が片足脱ぎ捨てられてゐた

こと等で之等は何れも有力な證據品として押收された。そして松山、阪本、末森、新川、明石などの敏腕な諸刑事が、之等の品を手分けして、其の出所を探し出すことに力めた。無論此の時も、彼の海野刑事は單獨行爲を取ること許された。

憊うして刑事も調査も、晝夜寢食を忘れて、東奔西走、活動を續けたけれども、其の結果或は兇器の庖丁から手蔓を求めたり、又は日頃素行の悪いのが原因であつたりして、三人四人と嫌疑者を引致したが、何れも少し調べ進むと直ちに嫌疑が晴れて了ふ。依然として此の事件も、彼の横山町事件の如く、五里霧中に彷徨するに至つた。

五日と経ち十日と過ぎた。併し犯人は更に捕縛らない、憊うなる世間の噂は新聞紙の記事となつて、或は揶揄的に警察を攻撃したり、又は叱咤的に鞭撻したり、あらん限りの筆鋒を以て、小野署長の身邊に迫つた。あ、併し如何に揉搔けばとて焦ればとて、警察署員が神でない以上、如何でか其の犯人を霧中に指摘することが出来ようぞ、聲無きに聞き、姿無きに見るてふ敏腕な刑事でも、鬼と呼ばれた警部でも、如何せん神通力を有することは出来なかつた。併しながら一縷の光明は其處にある。刑事が神でないと同時に、賊も亦人間である。彼に神通力が無ければ、之れに翔天地潜の術も無い。共に天を戴いて此の世に生存する以上は、何處の空でか捕縛せずには

措かうぞと、今は警察署員も殆んど意地になつて獅子奮迅の活動を續ける。

茲に海野刑事は彼の朝、兇行の現場を實見した時、弗と横山刑事件を思ひ浮べて、其の殺害の方法に、頗る似寄りの点を發見した。頸部を斬つてゐること、いひ、兇器を現場に捨てゝゐること、言ひ、其の外類似の点は擧げれば限りの無い程である。

「萬一したら同じ犯人かも知れないぞ。」

彼は心竊かに慙う思つた。事件があつてから十日目の今日、彼は小村方で盗まれた金の、在所を知つてゐさうな人物を探して、夜の十時頃まで駆廻つた。併しそれも結局徒勞に歸したので、今度は小

村の隣家の人々に目を付けた。慙うして十一時頃飄然と那賀町の九丁目へ遣つて來た。

海野刑事の足は、自然と兇行の夜賊の忍び込んだ刑跡のある、裏の板圍ひの外近く運ばれた。空は隈なく冴々渡つて、中天に澄んだ陰曆十八日頃の月影を取巻いて、星が点々と輝やいてゐる。美しい月光を浴びながら彼は考へた。

「兇行の夜、賊は裏に脱糞してゐた。脱糞は心を静めるものだと思つてゐる。そして多くの泥棒の中には犯罪と脱糞との密接な關係が迷信的に傳へられてゐる。此處ことを大膽に行つた賊は、餘程手馴れた奴に違ひない、そして尙且つ、此の狭くて窮屈で、判り難い裏

口から、忍び込んだ所を見ると、賊は餘程家の勝手を知つた奴だ。否勝手を知らなければ、箆筒の金だつて取出せない譯だ。」

此處ことを承へて、さて彼は賊の真似をして、一度忍び込んで見よう、と、窃と板垣ひに手をかけた。そして苦もなくヒラリ乗越へて、邸内に入つた。と此の時突然、椽の下から一匹の犬が飛び出してツン／＼と吠へ出した。

「之れは不可ん、叱ッ、叱ッ。」

と叱つたが、犬は益々火の付くやうに吠へ立てる。其の聲に驚いて中から主人と、此の頃手傳ひに来てゐる女どが現はれて、

「誰だ。」

と尋ねたが、海野刑事の黒い影を見るより、吃驚して、

「泥棒々々。」

と叫び立てた。刑事は笑つて、

「泥棒ではない、自分は刑事です。」

と懐中電燈に自分の顔を照して見せた。主人も大事件の後だから、一時は驚いたもの、刑事の名刺を見て安心した。此の時弗と刑事の頭に何物か、閃いた。

「さうだ！」

彼は無意識に呟やいてボンと手を叩いた。彼は果して何を考へ出したのであらう？。

一九 兇漢遂に就縛

最う覺悟は定めた

海野刑事が思ひ出したのは外でもない。此の家で犬を飼つてゐることなのだ。自分が普通の風体で忍び込んだのでさへ、火の付くやうに吠ね立てる。それに兇行當夜も此の犬が居たとすれば、怪しい賊が来たのを吠ねぬ筈はない。而も近所の人は更に、其の吠ねた聲を聞かぬといふ。尤も知つた人間は吠ねぬ筈である。殊に賊は家の勝手を知つてゐる、萬一したら賊は此の家に繁々出入するものか、さなくば家の内部に居る者ではあるまいか？此處まで考へた時、海

野刑事の胸には、兇行當日の朝、屍體の傍に立つて、ブル／＼震れてゐた啞者の姿が彷彿として眼前に現はれた。
「お、彼奴こそ怪しい、併し彼奴には人殺しをする程の肝は無い、或は彼奴の友人か？」
恚う思つた時、續いて刑事の胸には、曾て二澤橋の附近で、二人連の怪しい男を見たこと、並びに其の後、好く似た二人が春日遊廓の竹梅樓に登樓する處を見たことが思ひ出された。
海野刑事は最う、何の躊躇もなく、其の足を竹梅樓に運んだ。不景氣の故か、女郎の染吉はまだ残つてゐた。刑事は客の風を装つて染吉を相方に揚げた。勿論彼の目的は女郎買ひにあるのではないの

だ。

「過日から聞かう／＼と思つてゐた。お前の處へ好く登揚る、色の青白い若い男があるだらう、實は彼の男に俺は金の貸しがあるのだが、彼の男の家をお前は知らないか。」

慙う尋ねられて、染吉は鳥渡考へたが、

「色の青白い人つて……ではあの金さんなの。」

「さうだ、俺は名前もろく／＼知らないんだが、先日俺が友達と一緒に歩いてる時、途中で彼の男に逢つて、友達に金を貸せつていふから、僅かだけれども俺が貸して遣つたさ、彼奴の名前は何といふのかね。」

真しやかな言葉に染吉は信用して、

「名前は金さんつていふんだけど、待つて下さい妾の所へ手紙が来てゐましたから。」

と云ひつゝ立つて、鏡臺の抽斗明けて、取出した封筒に、

「市内主水町二三水田金吾……成程判つた、それでは矢張り、工廠へ出てゐるんだな。」

と態と呟やくやうに刑事が云へば、

「いゝね、工廠では無いの、多島とかいふ憐寸の工場へ通つてゐるですつて……。」

「何、多島……多島？」

と刑事は忽ち大聲で叫んだ。其の様子が餘り突然だったので、

「まあ、什うしましたの、其座に驚いてさ。」

海野刑事は多島と聞いて、雀躍して喜んだ。あゝ多島こそは彼の横山町事件で、怪しい番傘の出所だといふので、諸刑事が全力を擧げて探した所なのである。

「金さんと一諸に來た男があつたらう。」

「わゝ、あの啞者の人なの？」

と染吉は氣も付かない。

「わゝッ、啞者？、それが……。」

と刑事は更に周章てたが、凝乎と隠して、

「さうだ……その啞者、彼の男は儘か那賀町九丁目目^{てうりめ}の仕立屋へ通つてるのだね。」

今度は刑事が山をかけた。

「さあ、其處までは知りませんが、兎に角金さんと、好く一緒に來るのよ。」

「さうか、まあそれも好いとして、俺は急に用事があつたのを、れてゐた、今夜は泊らないで歸らう。」

「あら、一體何事ですの、登樓る早々歸るなんて。」

「いや、急用を思ひ出したのだ、お前は兎も角俺が揚げたのだから、今夜は悠くり休むが好い。俺は歸る、什うも氣の毒だつたね。」

別に怒つた様子も見ないので、染吉は不審ながら歸るといふのを強いて止めはしなかつた。

海野刑事は竹梅樓から送り出されると一目散、俵を飛ばして主水町に近い巡査派出所へ駆込んだ。

「君、濟まないが戸口調査簿を鳥渡……。」

深夜のことだから巡査は驚いて、

「海野君ぢやないか、遽だしい何事だ、例の事件の手係りでもあつたのかね。」

「いや何に、鳥渡その……。」

と瞬眈な返事をしながらも、手は早くも戸口調査簿を抱けて主水

町二十三番戸を繰出してゐた。其處には靴職永田蘭太郎と戸主の氏名があつて、次に妻と長男以下男女五人の子の名が書き出されてゐる。中程に三男金吾二十六才とあるのが、紛れもない海野刑事の探す當人なのだ。彼は更に町の地圖を見て、家の所在を慥かめると共に、

「いや大きに邪魔をして濟まなかつた、ぢやこれで失敬する。」

と言捨て、駆出した。主水町へ来て見ると、深夜ながら、略見當を付けて置いたので、永田の家は直に判つた。時刻は最う彼此れ午前一二時頃であつた。

「おい永田君、急用だ、鳥渡明けて呉れ給へ。」

海野刑事は憊う言つて、トン／＼と表の雨戸を叩いた。叩く内も耳を澄まして、逃走でもされてはと氣を配る。

「何事ですか、何誰ですか？」

「いふのは主人の聲らしい。」

「いや、多島の工場に火が出て危険いから、金吾さんに直ぐ来て貰ひたいんで……。」

と刑事は出鱈目をいふ。すると計略圖に當つて、誰か起きて雨戸を明けた。其處から刑事は飛び込んだ。

「金吾さんは内ですか。」

主人らしい爺が眠い眼を擦つて、

「へ、二階に寝てゐます。」

「それは幸ひだ、實の處俺は九連警察署の刑事です。」

「え、ッ、刑事さん！」

親父の蘭太郎は眼を圓くする。

「いや驚くことはない、少し調べるものがあつて來たのだ、直ぐに二階へ案内して貰ひたい。」

憊う云ふ内にも心が急くので、刑事はスター／＼二階へ上つて行つた。此處ことは夢にも知らず、二階の六疊では金吾が、前後も知らず寢入つてゐる。

「おい、起きろ。」

金吾はハツとして眼を覺した。

「九連署の刑事だ、お前を殺人罪の嫌疑者として引致する、之から本署に同行して貰ひたい。」

之を聞いて、親父は氣も轉倒せんばかり驚いて、刑事の袖に取籠つた。

「だ、旦那様、それは違ひます、忤に限つて其塵……殺人など、大それたることをする人間では御座いません、何かの間違ひで、仕うか免して遣つて下さい。」

とおろ／＼聲で云ふのであるが、刑事はその言葉を耳にもかけず、逃走されてはと思つたので、金吾を後ろ手に縛して了つた。そして

證據の品もがなと、押込の中から手文庫の抽斗まで調べたが、最後の押込の奥にある支那靴の中から、裾の切れた黒羅紗のマントが現はれた。

「た、之こそ正しく横山町事件で、被害者に引裂かれたマントに違ひない。」

と薄暗い電燈の明りに透して見れば、紛ふ方なき血潮の痕、點々と印されて二年前の兇行を徐ろに偲ばせるのであつた。

「さ、此の證據の出た上は、最早動かぬ犯跡眞直に白状して了へ。」

「旦那様、違ひます、忤に限つて……。」

と親父は尙も取籠る。然るに本人の金吾は、驚くかと思ひの外、

泰然自若として、眉根一つ動かさなさい。

「父さん、最う駄目だ、俺は諦めたよ、恚う睨まれちやア仕方がない、旦那、長い間た手敷をかけた、如何にも横山町で人殺しをしたのも俺、又小村の女將を殺して、二百四圓といふ金を奪つたのも俺でさあ、最う何にも言はない、縛つて行つてお前さんの手柄にしてお呉んなさい、併しねわ旦那……。」

金吾は鬼のやうな眼から、ポロ／＼と涙を流した。

「世間つていふ奴は得手勝手なものだ、神様は依古最負が餘り非道過ぎらあ、同じ人間に生れながら、金のある奴と無い奴と、華族さんと穢多と、不具者と普通の人間と、藁の上から身分が異ふ世の中

だもの、悪い心も起りまさあね、俺は穢多なんだ、人の賤しむ穢多と生れて、一生涯頭の上りつこはない身分だもの、遂う／＼悪い心起しちやつて、戀の意地から中尉の奥さんを殺し、一度も二度も罪は同じだからと、廓の金に詰つて小村の女將も殺しました。へい、もう些とも隠すことはありません、俺が人殺しの手助けをしたのは、小村の家に使はれてる啞者で高村正藏といふ野郎です。」

之だけ言ひ終ると、有繫に重なる罪を悔悟してか、深い溜息を漏して、首垂れて了つた。

「悴、それぢア、お前が、あの怖ろしい人殺しの犯人だつたのか。」
親父も今は泣くより外はない。母親も兄弟も共に起出で、此の

場の有様に、只顔見合せて咽び入るのであつた。海野刑事は静かに捕縄を取つて、

「委細は本署で申立てるが好い、さ、一緒に行かう。」と引立てた。外には風が出たと見えて、颯と雨戸を打つ音が聞えた。

二〇 再び平和の春

我國警察界の威信

翌る朝は麗らかに晴れて、人の心も浮立つやうに、清々しい小春の陽が、巍然として聳ゆる九連警察署の甍を照してゐた。

諸刑事は連日不眠不休の活動に、殆んど疲れ切つてゐたが、それらしい顔も見せない。今朝も早くから登臨した。中にも松山、新川の兩刑事は、生々した調子で署長の前に出た。勿論此の日は各方面から有益な手係りの報告を齎らしてゐたので、署長と田邊警部とは、愈々犯人捕縛の時の近付いたことを自覺して、何れも喜色を面に湛へながら、機密室に集つてゐた。

松山刑事等の報告に依ると、彼の小村方の兇行に際して、現場に落ちてゐた庖丁は、田島燐寸製造工場の品であつて、何者の爲にか盗み出されたものなること、及び其の工場で先頃金物類が盗難に罹り、其の犯人は多分水主町から通ふ職工で永田金吾といふ者の所爲

と見込みの付いたこと等であつた。

「兎も角金吾といふ者を調べる必要がある。」

と田邊警部が同意した折柄、又も三名の特務巡査がニコく顔で歸つて来た。

「愈々有力な嫌疑者を引張つて来ました。何しろ啞者だから、事情は更に判りませんが、小村方に使はれてゐる職人で、高村正藏といふ奴です。」

と言つたのは光下といふ特務巡査である。彼は高山、平石の兩巡査と共に、啞者の正藏を引立て、いそぐ歸つて来たのだ。田邊警部は不審の眉を擧めて、

「松山君の話では、多島工場の職工が怪しいやうにも思へるし、今又此の啞者を有力な嫌疑者とは訝しい、何しろ一應啞者を調べて見よう、或は兩名の共謀しての仕業かも知れん。」

と言つてる所へ、又も一人の男を引立て、意氣揚々と歸つて来たのは、彼の海野刑事であつた。彼は怖る／＼進み出て、

「署長閣下、並びに警部殿、兩事件の犯人は遂に逮捕致しました。

即ち此處にゐる永田金吾こそ、昨年横山町で富島中尉の夫人を殺し今又那賀町九丁目小村の妻を殺した恐るべき兇行者であつたのです。尙彼れは共犯者があります、それは啞者で而も小村の家に……。」

と言ひかけたのを警部は制して、

「いや判つた、其の共犯者は此處にある。」
と高村正藏を突出した時、二人の犯人の眼には一杯の涙が輝やいてゐた、此の時桂木、松江の兩部長は左右から海野刑事の肩を撫でながら、

「海野君、よく盡して呉れた、それでこそ君の信念は尊いものとなつた、君が今日までの惨憺たる苦心と努力とは、實に敬服の外は無
い。」

と口を極めて賞讃した。署長は徐ろに髭を撫しつゝ、一座の人々を見遣つて、

「之も熱誠の賜である。海野刑事一身の功績は決して君一人の功

績ではない、刑事一同の名譽、否九連警察署の存在を社會に誇り得ると同時に、我國警察界の威信を發揚するものと云はなければならぬ、俺は實に此慶喜ばしいことは無い。」

此の言葉に一同は、押へ切れぬ無限の満足を、窃と微笑を表はすのであつた。田邊警部は更に一同を指揮して、取調に移つた。

あゝ犯人檢舉の此の報が翌日の新聞紙に依つて傳へられた時、三十萬の九連市民は如何に狂喜し驚嘆したことであらう。暴風一過人の世は恁くして一たび暗雲に覆はるゝとも聽ては輪は礫爛として、人の上を輝すのであつた。自然の反逆者、遊蕩も、怠慢も、虚偽も、聽ては自然の愛を知るのである。其處に平和の光は輝やくのであつ

大正六年十一月二十八日印刷
大正六年十二月三日發行

定價金(貳拾五圓)

不許複製

發行人兼編輯人

東

隆

一

吳市溝路町百三十五番戶

印刷人

上

田

一

吳市新泉場町八十七番戶

印刷所

上

田

印刷所

吳市新泉場町八十七番戶

電話四四六番

吳市本通四丁目

發賣所

友田

誠

真堂

支店

電話五二二一
五二二二
五二二三
五二二四
五二二五

終

